

窯焚き



神山清子

私が、室町、鎌倉当時の穴窯を築き、信楽自然釉に命を燃やすもとになったのは、一枚の古陶片である。古窯を捲し、古陶片を求めて歩くうちに、宝石のような美しいビードロ釉にいつしかとりつかれたのである。

どのような陶工が、どのようにして製作したのであるう

か。どんな窯焚きをし、どのような暮しをしたのであらうか。古窯の中から、古陶片の一枚一枚が次々と私に語りかけてくれるるのである。そうして果てしない幻想へと発展し、天平年間の世界へと旅立ってしまった私である。

焼物の原点に戻った私ではあつたが、過去の生活や心には戻る事はできなかつたのである。穴窯を焚き出してからは、

失敗失敗の連続という最悪の状態に陥つたのである。流石の私も、母や子どもたち、弟子たちの生活を思つた時、全身の血が引いてくるのを感じた事を今も思い出す。

しかし人間、どん底になつた時程、勇気が湧いてくるものである。三度の食事もできる限りに切りつめて、空腹さえなければ平氣で暮せるのである。また昔の人人が良く言ったように、金は天下の回りものと、どんな冒險も飛び込んで受ける事ができた。

私が求める自然釉は現在出ていないが、窯焚に空腹を感じず、思い切り働く事ができるようになつた。無我夢中での窯焚きは、無駄ではなかつた。六年の歳月がいつしか過ぎた今、わずかなりに自然釉に光が見えて来た。それは個展という形で、発表できるようになつて来だしたのである。

穴窯に一度火が入ると、二週間連続で、人と火の戦いとなるのである。三人で当番を作り、昼夜なしで火をたやすことなく、焚き続けるのである。わずかの気のゆるみも、もはや

許すことはできない。私たちのわずかのミスで炎の温度は、あつという間に百度も下がるのでだ。

炎は生きているのである。私たちを嘲けり、泣かせ、狂氣へと引き込み入れるのである。松割木を投入することに、窯の中はゴオーッとなるのだ。炎は風を起こし、土器一つ一つをなめつくし、土を溶かし、灰を運び、空高く煙となつ

て、何處ともなく消え去つて行くのである。炎の魔術によつて、あの神秘的な窯変釉が生み出され、二十日目に私たちの眼の前に現わされてくるのである。

出来上がった作品が成功であろうとなからうと、私は焚く事のよろこびを、今大切にしている。天平年間の人々が、生きるために、生活用品として、無心に焼いたのである。その雜器が今もこの世の中に数多く残されている。私たちのすばらしい作品が、私たちの重要な文化財として保存されているのである。天平年間の人々の生きたあかしである。私もこのようにして生きたあかしを残したいのである。

それが今私の求めている信楽自然釉である。一生かけても

完成する事ができないかも知れない。完成されない時は、子

どもが私の仕事を引き受けてくれると言う。子どもが自分なりの生き方により、私の求める仕事以上の自然釉を探し求めてくれる事を信じる。私の歩む道を、私の苦しむ姿を、窯との戦いを見つめて、私と暮した生活の中から何かを感じ取つてくれる事を願つてゐる。

人は最悪にして最低になつた時に自己を見つめ直す事ができるものである。そして一生の仕事に出会う機会に恵まれるのである。今私は、信楽の土地で、信楽の土を用い、何百束という松割木を灰にして、信楽焼といふ世界的な焼物を焼いている。信楽自然釉を残してくれた過去の多くの陶工や、信楽の先人たちに対する深い感謝の気持ちと共に、自然釉を求めて生きる喜びを知つた私は、最高に幸せである。

私が声を大にして言いたい事は、一生の仕事に出会つた時、勇気を持つて、前進することであり、壁に付き当たつたら、はだかになつてその障壁に向かつて、それを乗り越えて行つてほしい。そうすれば、道は開け、栄光は遠くはないであらう。

(陶芸家)